第4回日本家族社会学会大会

標記大会は，1994年9月5日（月）～6日（火）の2日間にわたり，神戸市の甲南女子大学において開催された．昨年より開催期間が1日短縮したが，報告数は倍増，内容も多様化し，学会の成長ぶりに驚かされた．本研究所からは渡邊吉利，西岡八郎，小島宏，才津芳昭が参加し，渡邊，小島の両氏が報告を行った．

1日目の午後，昨年に引き続きテーマセッション「全国家族調査に向けて・パートⅡ」が開かれ，学会として全国調査を実施する場合どのような視点が必要か，いくつかの提案が出された．「なごや会」からは，未成人子の親子関係を捉える場合，母子関係だけでなく父子関係や父母子の3者関係で見る必要があるとの指摘が，また玉里恵美子氏（龍谷大）ほか2名からは，成人子の親子関係を捉える場合，①「同居」の内容の変化，②地域による価値観の違い，③未成人子親子関係から成人子親子関係への移行期（「脱青年期」）の意味に注目すべきだという指摘がなされた．最後に山田昌弘氏（学芸大）から，現代日本の親子関係を支配する「子どものために」というイデオロギーの構造を，ミクロ的，マクロ的に調査すべきだという提言がなされた．いずれも的を射た指摘ではあったが，ある会員が発言したように，全国調査という枠の中で何ができ，何ができないかを今後詰めていく必要があるだろう．

2日目の午後は，国際家族年にちなんで，大会総合テーマセッション「国際家族年と家族」が開かれた．パネリストとして新　陸人（奈良女子大），柳原佳子（吉備国際大），岩上真珠（明星大）の3氏が報告を行い，それぞれ社会システム論，ジェンダー論，人口・世代論的観点から近代家族ないし現代家族の分析がなされた．特に，新氏と柳原氏の近代家族とそのゆくえに関する見解はユニークかつ挑戦的なもので，家族の「変容」ないしは「解体」，「消滅」がそこかしこで語られるいま，家族を研究するということはどういうことなのか，改めて我々に考えさせる材料を提供してくれた．

（才津芳昭記）

日本建築学会1994年度大会（東海）学術講演

日本建築学会の1994年度大会学術講演が，1994年9月8日（木）から11日（日）までの4日間，名古屋市の名城大学で開催された．ここでは全項目の内，都市計画部門の主だった論文のテーマを掲げておく．

- 清正崇・中川敦夫・大島孝治（九州大）：「家族類型別世帯数の推計に関する研究」
- 佐々井司：「中国における高齢者の居住実態に関する研究」
- 佐々木雅一（豊橋技科大）：「豊橋市都心部商業地域の土地利用用途と居住人口の変化について」
- 白井清文・和田幸信（足利工大）：「人口の流出入の特徴と人口・人口の集中性との関連について―地方小都市の人口構造の経年変化に関する研究」
- 松本恭治（国立公衆衛生院）：「同潤会アパートに於ける人口動態に関する研究」
- 廣島清志：「住宅状況が女性の結婚年齢に及ぼす影響」
- 山崎奈巳（地域問題研究所）：「大都市における女性の出生行動と居住環境に関する研究―京都市における幼稚園・保育園の保護者アンケート調査を通して」
- 伊藤康子（京都府大）：「変容する現代家族のライフスタイルと居住ニーズに関する研究」
- 大江守之：「若年夫婦のみ世帯（ＤＩＮＫＳ）の将来動向」
- 三宅醇（豊橋技科大）：「単身居住の変化に関する一考察」
- 谷武（豊橋技科大）：「年齢階級別世帯主率の予測に関する基礎的考察」
- 二野宮博明（豊橋技科大）：「都市類型別のＬＣＭセル別持家比率の検討」
- 近藤千鶴（豊橋技科大）：「豊橋市における住宅型別居住者特性（ＬＣＭ・ＳＳＭ）」
- 清水伸行（ナショナル住宅産業）：「金沢市市外化区域における人口動態と住宅状況に関する考察」
- その他

パネルディスカッションでは，三宅醇（豊橋技科大）から「住宅需要構造からみた都市住宅」のなかで日本の人口構造の変化と住宅需要の関係についての発表があった他，研究協議会では『高齢社会の到来と公共住宅施策』